

はじめに

本書は、大学の学部を卒業して大学院に入学し、博士学位を取得したのち、研究者として本格的に歩いていくことを目指す文系、とくに人文系の研究者を応援する本です。

大学の学部を卒業するまでの道は、入試という競争に何度かさらされるものの、周囲の友人の多くも大学に進学しますし、かりに進学者が周囲に少なくても、学部卒業までのイメージは社会的に共有されていますので、迷うことはあまりありません。

ところが、学生生活を終え、社会に出て働く場合でも、大学院に進学する場合でも、人によって歩む道が異なります。歩むべきルールが消えてしまうので、多く人は途方に暮れて不安になるわけです。もちろん、就職する場合は、就活という社会的な枠組みがあり、先輩のリクルーターや就職支援室の相談員から具体的な話が聞けるでしょうし、理系で大学院に進学する場合は、研究室の先輩の多くも進学しますので、ロールモデルが身近に存在します。しかし、文系で大学院に進学する人は、身近なロールモデルが存在することはまれです。このため、自分で進むべき道を切り開かなければならない状況に置かれてしまうのです。

私自身は、一橋大学に勤務していた2005年当時、同大学大学院言語社会研究科、留学生センター、および国立国語研究所の3者連携で、第2部門（日本語・日本文化部門）と呼ばれるコースの立ち上げに関わり、大学院生の指導を始めました。その後、連携先である国立国語研究所に異動しましたが、大学院生の指導は継続し、指導教員として2021年までにちょうど20名の博士号取得者を送りだしました。そこに、修士課程のみを修了して社会に出た学生、博士号の副指導の学生、他ゼミで私の授業を履修している学生、さらには非常勤先の早稲田大学大学院文学研究科・日本語教育研究科の学生、集中講義に出講した東北大学、南山大学、北京外国語大学北京日本語学研究センターなどを加えると、かなりの人数の大学院生と接してきたこととなります。

そのなかで直面したことは、多くの大学院生は、大学院で研究するとはどういうことか、将来研究者になるのにどのような道を歩めばいいかといった本質

的なことを深く考えず、ともかく大学院に進学すれば何とかかなるという思いで進学してくるという事実でした。いくら文系大学院に進学する人はマイノリティだからとは言え、インターネット上に必要な情報は存在していますし、もっと詳しく知りたければ、各大学の大学院説明会に出席したり、学会に参加したりして情報を収集することも可能です。しかし、そうした情報に接することなく、やみくもに大学院に進学してきて厳しい現実と直面し、「こんなはずではなかった」と、行き詰まってしまうのです。

しかし、そうした大学院生のことを批判することはできません。私自身も大学院生時代、まさに、深く考えずに進学を決断した一人だったからです。ただ、当時は情報自体が少なく、大学院の状況を調べることは困難でした。これにたいし、現在は Web 検索をすれば簡単に情報が出てくる時代です。それでも、大学院の現実を知らずに進学してくる人が多いのはなぜなのだろうか。そこではたと気づいたのは、インターネットで検索したくても、そもそもどういう言葉で検索してよいのかわからないのではないかと。さらに言うと、そもそも検索に必要な概念の存在自体を知らないのではないかとということでした。

本書は、「研究する人生」を始めるにあたり、研究者の世界がどのような仕組みで成り立っているのか、その世界を生き抜くために必要な知識は何かといった情報を網羅したマニュアルです。大学院での生活や、就職後の人生で出会うさまざまな場面とキーワードを本書にぎっしり詰めました。

研究者として歩んでいくうえで重要な、本書で取りあげた言葉を 20 語紹介しましょう。きちんと説明できたら 1 問 5 点で、合計で 100 点になります。

研究者に必要なワード 20

- | | |
|--------------|---------------|
| ① 研究計画書 | ⑪ パイロット調査 |
| ② リサーチ・クエスト | ⑫ ポスター発表 |
| ③ 批判的思考 | ⑬ 論文修正報告書 |
| ④ CiNii | ⑭ researchmap |
| ⑤ 剽窃 | ⑮ 学振PD |
| ⑥ DOI | ⑯ CCライセンス |
| ⑦ ジャパンサーチ | ⑰ テニユア・トラック制度 |
| ⑧ 半構造化インタビュー | ⑱ オープンアクセス |
| ⑨ カイ二乗検定 | ⑲ 科研費 |
| ⑩ 研究倫理 | ⑳ ライデン声明 |

何点ぐらい取れましたか。自信を持って答えられる言葉もあったかと思いますが、なんとなく耳にしたことのある言葉から、初めて見た言葉まであるのではないのでしょうか。大学院をこれから受験する人はその多くを知らなくて当然ですが、大学院の博士後期課程で学んでいる人や現役の大学教員でも、90 点を取れる人は少ないのではないのでしょうか。

ここ 10 年で研究をめぐる環境は大きく変わりました。その要因となったのは、研究のデジタル化、グローバル化、若手支援の充実です。そうした情報に疎いのは、じつは大学院生を指導する教授です。教授は研究者としてほぼ「あがり」なので、そうした環境の影響をあまり受けません。そのため、最新の事情をよく知らないケースもあるのです。環境の変化の影響をもろにかぶるのは、いつの時代も若い人たちです。

私自身は若い人に、「研究する人生」を歩むことを積極的に勧めようとは思いません。身近な人に大学院への進学を相談されたら、勧めるかどうか微妙です。経済的にも精神的にも厳しい状況が長く続くわりに、将来、それに見合うだけの待遇が得られる確率がけっして高くはないからです。

しかし、厳しい状況に置かれようとも、新しい発見と出会えるワクワクする気持ちを何よりも大事にし、大好きな研究を続けて一生を送りたいという希望、そして固い決意と覚悟を持って進む人を支援したい気持ちが、私のなかに強くあります。そうした人にはまず本書を熟読し、暗黙知だらけの研究という世界の仕組みを十分に理解するところから始めてほしいのです。

本書が研究者を志す人の助けになることを心から願っています。

研究者すごろく

大学院受験生
序章 | 研究への道
スタート

進学決意
第1章 | 決める
1.1

入試準備
第1章 | 決める
1.2~1.3

修士課程
院生
大学院合格!

文献収集
第3章 | 読む
3.1~3.3

研究テーマ
設定
第2章 | 考える
2.1~2.4

調査設計
第4章 | 調べる
4.1~4.3

「研究者の一生」を一望する見取り図です。
自分がどこに向かっていて、今、どのコマにいるのか、
このすごろくで確認しながら、本書を読み進めてください。
1.1などの数字は目次と対応しています。

ゼミ発表
第5章 | 話す
5.1

博士課程
院生
博士進学!

学会発表
第5章 | 話す
5.2

研究仲間
作り
第7章 | つながる
7.2

修士論文
執筆
第6章 | 書く
6.1~6.2

調査実施
第4章 | 調べる
4.4~4.5

研究指導
第7章 | つながる
7.1

論文投稿
第6章 | 書く
6.3~6.5

博士論文
執筆
第6章 | 書く
6.6

任期付教員
非常勤教員
博士号取得!

研究生生活
第8章 | 生きる
8.1~8.2

デジタル
発信
第7章 | つながる
7.4

任期無
常勤教員
テニユア取得!

社会連携
第7章 | つながる
7.3

キャリア
第8章 | 生きる
8.3

名誉教授
ご臨終
ゴール

序章 研究への道

門を叩け、さらば開かれん。
(『聖書 文語訳』「マタイ伝福音書」7章7節)

0.1 研究は恋

Q 研究は、難しい特別なことのように思えます。私にできるのでしょうか。

A 研究は、難しいことでも特別なことでもありません。研究は恋と同じです。研究する対象への熱い思いと鋭い洞察力があれば、きつとうまういきます。

「研究」という言葉には特殊な響きがあります。勉強とは違い、どこか高尚で、能力の高い一部の人だけが携わる別世界の営みに聞こえます。これから大学院への進学を考えている人は、「研究などというものが、はたして自分にできるだろうか」と悩んでいるかもしれませんし、すでに「研究する人生」を歩みはじめた人は、選ばれし者としての誇りを胸に、日々の研究活動に従事しているかもしれません。しかし、研究はほんとうに特別なことなのでしょうか。

私が思うに、**研究は恋と一緒にあり、何も特別なことではありません**。ある人が好きになり、その人のことをもっとよく知りたいと思う気持ちと、ある対象が好きになり、その対象のことをもっと深く知りたいと思う気持ちは、まったく同じです。

誰かを好きになったとき、何かを好きになったとき、誰でも研究を始めます。小さい子どもが鉄道や恐竜に興味を持ったとき、驚くほどの深さで研究を始めますし、株式投資や馬券購入を始めた大人も、損失を出さないように企業の過去の業績や競走馬の過去の戦績の研究を始めます。何かにはまった人はかなら

ず研究をするのです。大学で行われる研究を特別視する必要はありません。

恋をしたとき、まず、好きになった相手がどんな人か、相手のことを知りたいという気持ちから研究が始まります。相手のしぐさ、表情、服装、持ち物など、相手の外面を慎重に観察し、そこから、相手がどんなタイプかを分析します。ぼりぼりと頭を掻く恥ずかしがり屋、まばたきが多いあがり症、露出度の高い服を着る目立ちたがり屋、高価な財布を持っている縮まり屋、小さなカバンを持っている自由人など、外面を注意深く観察・分析すると、いろいろな情報が見えてきます。研究もそれと同じです。**研究とは「見えるデータから見えないしくみを解明する」ことです。**そこで、研究者は、対象を慎重に観察・分析することから研究を始めます。

つぎに、相手の言動の意味を考えます。研究では考察と言って、なぜそうなるのかという理由を考えます。好きになった相手が自分のことを好きかどうか知るために、相手の言動にどんな意味があるか、その理由を考察しなければなりません。相手が自分の前でよくあくびをすとか、一緒にいてもスマホの画面に夢中であるとか、話しかけても言葉少なに返してくるとかだと、脈はないかもしれません。そうした言動の背後には、「あなたには興味がない」という理由があるからです。これにたいして、相手が自分のそばによく来るとか、相手と視線がよく合うとか、相手が自分によく話しかけてくるとか、相手の態度が自分に優しいとか、そうしたことが重なれば、脈があるというサインになるかもしれません。相手が自分に興味があると考えれば、つじつまが合うからです。

研究が恋と同じで、研究対象の隠れた内面を明らかにするものだとすれば、**外面から見える事象の観察、観察から得られたデータの分析、観察された事象が起こる理由の考察という「観察」「分析」「考察」の3点セットが不可欠**です。この三つが、研究対象の隠れた内面を見通す力である洞察力を支えます。

研究の面白いところは、行き詰まっていた研究が、ある出来事がきっかけで、急に段階が進むことがある点です。新しいアプローチが偶然見つかったとか、思いこみによる誤解が突然晴れたとか、そうしたことが起きるのも恋と一緒に。このようなきっかけで研究のステージが進むと、研究にたいする思いがどんどん深まります。修士課程を修了したら社会に出ようと思っていた人が、博士課程への進学を決断することがあるのは、研究対象への愛情が深まったからでしょう。博士課程進学は研究対象への恋の告白になります。

一方、博士課程に進学して、研究対象への情熱が次第に冷めてくることがあります。いわゆる倦怠期が訪れるのも恋と一緒に。同じ相手と向きあっていると飽きてくるのは自然なことです。新たな好奇心が芽生えるよう、それまでの付き合い方とは異なる付き合い方をしてみるなど、飽きない工夫が必要になるでしょう。

研究対象と真剣に付き合いつづけていれば、博士課程を終えるころ、研究対象への恋はいつしか愛に変わっていることに気づくでしょう。そして、博士号を手にし、研究者としてアカデミックなポストに就けたなら、それは恋愛が成就し、結婚に至ったことになります。本書は、そうした「**研究に恋する人生**」を応援する本です。

0.2 研究者の一生

Q 「研究する人生」とはどんな人生でしょうか。

A 「受験生 ⇒ 修士課程 ⇒ 博士課程 ⇒ 任期付教員 ⇒ 任期無教員 ⇒ 名誉教授 ⇒ ご臨終」というプロセスを経る出世魚のような人生です。

私が東京駅そば、丸の内の丸ビルホールでビジネス日本語関係の講演をしたとき、やはり講演者として呼ばれていた落語家さんの囃を最前列で聞く機会があり、その迫力に圧倒されました。いなせな女性落語家、柳亭こみち師匠が囃のまくらで話されたことは、次のような内容でした。

落語家は入門後、師匠の身の回りの世話をする「見習い」から始まります。つぎに、楽屋に入ることが認められる「前座」になると、めくりをめくったり、太鼓を叩いたり、寄席の進行に必要な仕事を任されるようになり、師匠の許可が出ると高座に上げられるようになります。そして、入門数年で「二ツ目」に昇進します。「二ツ目」になると、師匠の身の回りの世話から解放され、楽屋の仕事もなくなります。「二ツ目」から10年ほどが経ち、囃家としての力量が認められると、「真打ち」昇進となります。「真打ち」になると、師匠と呼ばれ、弟子を取る資格が生まれます。ところが、柳亭こみち師匠によれば、「真打ち」のあとがあるのだそうです。それは「ご臨終」。ここでお客がどっと笑います。

落語家の一生

見習い ⇒ 前座 ⇒ ニツ目 ⇒ 真打ち ⇒ ご臨終

「ワカシ」⇒「イナダ」⇒「ワラサ」⇒「ブリ」の出世魚のように出世する、落語家の一生の話聞きながら、研究者も同じような一生を送るのではないかと思います。

落語家を目指す若者が師匠の門を叩くように、研究者を目指す若者は大学院の門を叩きます。つまり、大学院の受験生は「弟子入り志願」です。大学院の研究生や聴講生も、大学院の入試を受験するという点では同じだと考えられるでしょう。大学院に無事合格すれば、「見習い」の生活が始まります。これが修士課程の大学院生(以下、修士院生)です。修士院生は自立した研究者とは見なされず、高座に上がれない「見習い」と同じランクにあると考えられます。その後、博士課程博士の大学院生(以下、博士院生)になれば、自立した研究活動を行えることになり(大学院設置基準第四条)、ときには高座に上がれる「前座」相当のランクになるでしょう。そして、無事博士号を取得し、大学の任期付教員になると「ニツ目」、その任期が取れ、晴れて任期のないパーマネントの大学教員になると「真打ち」になります。「真打ち」になればゼミを開講して弟子を取り、学位論文の指導ができるようになります。定年で大学教員を辞めて名誉教授となる「隠退」、そして、「ご臨終」を合わせれば、研究者の一生は次のようになるでしょう。

研究者の一生

受験生(弟子入り志願)…研究生や聴講生もここ

- ⇒ 修士院生(見習い:2年間)
- ⇒ 博士院生(前座:最低3年間)
- ⇒ 任期付教員(ニツ目:3~5年の任期が多い)…非常勤講師で食いつなぐことも
- ⇒ 任期無教員(真打ち:原則定年まで)
- ⇒ 名誉教授(隠退)
- ⇒ ご臨終

こうした出世魚のような見取り図があれば、研究者の一生がよくわかるでしょ

う。本書はこの見取り図、いわば「研究者すごろく」(入来 2004)に従って、それぞれの立場においてどんなことを考えたらいいか、真打ちとなり、後進を育成するようになった研究者の一人として、読者のみなさんと一緒に考えていきたいと思います。

0.3 本書の対象者

Q 本書が対象としているのはどんな読者ですか。


A 大学院受験生から任期無教員まで、すべてが対象です。


本書のようなテーマの書籍は、その多くがこれから大学院に進学を希望している若い人を対象にしていると思うのですが、本書の読者は、**受験生、修士院生、博士院生、任期付教員、任期無教員すべてが対象**です。


本書は、それぞれの項の冒頭に Q & A を入れる形で一貫して書かれていますが、読みすすめていくと、Q の対象が項によって異なることにすぐに気づかれるはずですが、本書では、それぞれの項の対象となる主な読者を、次のようなイラストを添えて示していますので、読むさいの参考にしてください。

「研究者の一生」のイラスト

受験生(弟子入り志願)…ひび入り卵 

修士院生(見習い)…ひよこ 

博士院生(前座)…若鶏(中びな) 

任期付教員(ニツ目)…成鶏(大びな) 

任期無教員(真打ち)…親鶏(子連れ) 